

「助けて」の声が聞こえるように

看護師 難波純

ETV 特集を最初に見た時、SOS を出されていた方が亡くなられた衝撃。死亡の多さ、非常勤の多さ、監督機能の機能不全、「必要悪」という言葉。これまでも心に響いてきていたことはありました。

今回のお話で最も大きな衝撃であったのは「忘れ去られる被害者」。気づいて然るべきことを気づかずに、見ようとしていなかった自分。

まだまだ病院に入院されている方々がおられて、亡くなられていっていること、任意入院であるのに退院先を自力で見つけることのできない方々が入院のままになっていること。

「患者を現実的に助けているのはジャーナリスト」の言葉が響きます。

今まだ入院されている方々に手を伸ばすことの困難さ、退院したいという希望の声を聞き取ることの難しさ、希望を持つ苦しさゆえに諦めておられるかもしれない状況、私自身が誰にどう話して助けてもらえばよいのか。

職場で数人には少し話をしましたが、まずは職場の人々、働いている地域の人々、住んでいる地域の人々、一緒に学びを重ねている人々と、えにしメールで資料も共有されたので、引き続き話していきたいと思っていますのが今の状況です。

今、入院されている方々にできること、今、目の前におられる滝山病院のような状況にある方々をそのままにしないこと。

外部の目になることも考えていきたいと思います。

また、世の中の人々の意識、人権のこと、教育のこと、経済のこと、こうであったらということも多くあり、医療、福祉や司法、行政、立法、ジャーナリズム、世の中の様々な人とつながっていきたくと思っています。